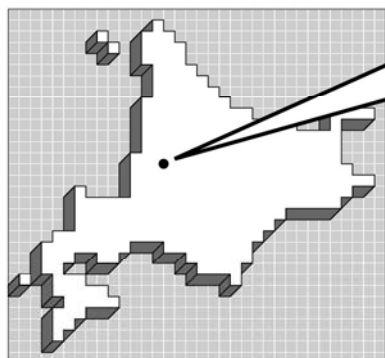


連載 わがマチの自慢 No.13



妹背牛町

ハーブの香るクリーンな
米づくりのまち



妹背牛町は総面積
四八・六四km²と、北
海道で三番目に小さ
な町である。平坦で、
町全域面積の七割が
耕地であり、耕地面
積の約九五%が田で
ある。農林水産省の

推計による平成二六年度の
農業産出額は約二八億円で、
そのうち米が八割を占めて
いる。稲作を基幹とした農
業の町であり、稲作への強
いこだわりを持って、米の
生産性や品質の向上に取り
組んでいる。平成三〇年産
以降の米政策の見直しが迫
る中、稲作基盤の確立に向
けた取り組みを中心に妹背牛
町を紹介する。

農業者の研鑽で
増加してきた直播栽培

直播栽培の取組みは平成六
年から始まった、三戸の農家
で二ha弱の面積から始まり、
取組みが停滞した時期もあつ
たが、平成二〇年以降は取組
農家数や面積が拡大し、平成
二八年度は四九戸で約二五〇

haと町内の全水稲作付面積の
一割を超えている。農家戸数
の減少が進み、一戸当たりの
経営規模が大きくなる中、地
域の水稲作付を守るため、春
先の労働力の競合を軽減する
ことができる省力技術として
導入が進んでいる。作付品種
は「ほしまる」である。

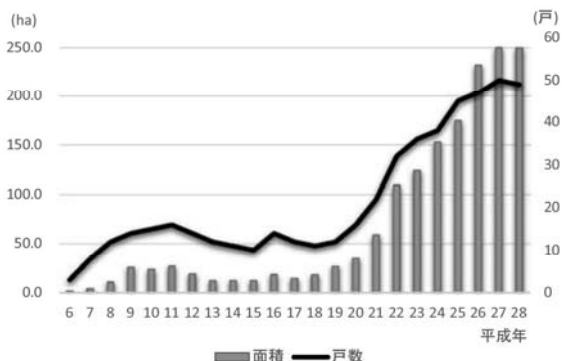


図 妹背牛町における水稲直播栽培面積と戸数の推移



播種作業

当初から農業者が「妹背牛町水稲直播研究会」(事務局・農協支所)を設立しており、この研究会の活動が直播栽培の普及と栽培技術の向上に大きな役割を果たしてきた。直播栽培は移植栽培に比べ、気象の影響を受けやすく減収するリスクが高い。費用面では、種苗費や除草剤などの資材経費がかかることに加えて播種機等機械導入経費がかかり必

ずしも低コストにならない。こうした課題を克服しようとする研究会では、研修会の開催や会員ほ場の生育調査などを行って会員の栽培技術の向上を図ってきた。また、機械共同利用組合を設立し、直播用機械を整備して共同利用を進めている。

平成二七年度の研究会の年間活動を見ると、四月下旬に「播種行程打合せ」を実施し、ほ場管理を含めた播種作業の注意・確認事項について関係機関から指導を受けてから、は種作業に入る。六月中旬には会員のほ場で現地研修会を行い、生育状況や技術対策を会員間で確認した後、各ほ場の生育調査を行っている。生育調査は、七月中旬、九月中旬にも農家グループが行っている。一月中旬には、「成

績検討会」を開催し、事例発表に加え、収量・品質などのデータを共有している。二月には、「栽培講習会」を行い、直播に関する情報や新技術の取得に努めている。

この研究会の活動の特徴は、会員個々のデータを公開して共有し、自らのデータと比較して、自らの栽培技術が会員の中でどの程度の立ち位置にあるのか気付きを促し、一人一人が研鑽を重ねることで、会全体の技術のレベルアップを図っている点にある。

また、機械については、播種機やプラウ、レベラーを整備しており、新規に直播栽培を希望する者が、新たに機械を取得しなくても直播栽培に取り組むことができるようにしている。こうしたこの会の活動により、直播栽培に取り

組む農家数や面積は確実に増加してきている。

三年連続最優秀受賞

こうした研究会の活動の積み重ねにより、妹背牛町の水稲直播栽培の技術は、収量性や安定性において、全道のトップレベルにある。農協支所によると、会の平均として、直播栽培の一〇a当たり収量は近年八俵から九俵で、移植栽培との差は〇・五俵から一俵程度ではないかという。一〇俵以上の会員も一〇戸を越えているとのことである。

技術の高さを証明したのが、一般社団法人北海道米麦改良協会が主催する「北海道優良米生産出荷共励会」だ。この共励会は、高い生産技術により良質・良食味米の出荷実績



平成26年度共励会授賞式
右が妹背牛町水稻直播研究会
会長 加藤忠美氏



整備された大区画ほ場

を挙げている生産者を表彰し、その取組みを関係者に広く周知して、北海道米の食味・品質向上により商品性を高め、稲作経営の安定に資することを目的に毎年行われている。平成二六年度からは、将来に向けた稲作生産基盤確保のため、規模拡大や省力化等に向けた技術確立・普及する必要があるとして、うるち米について「直播栽培部門」を新設した。

この「直播栽培部門」で、

平成二六年度に妹背牛町水稻直播研究会が生産グループの部で最優秀賞を受賞したのに対して、二七年度と二八年度には研究会の生産者が連続して個人の部で最優秀賞を受賞した。妹背牛町関係者の三年連続最優秀賞受賞となったのだ。

生産基盤の 整備による効率化

町内では現在国営農地再編事業（妹背牛地区）を実施しており、計画のおおむね九割程度まで工事は進んでいる。受益面積は約一、〇〇〇haで、二・二haを標準とする水田ほ場の大区画化や水路・排水路の整備を行っている。また、ほ場内の用・排水路をパイプライン化して土中に埋設することにより、地下水位の制御が可能なるほ場となっている。この工事により、ほ場の有効利用や大型農業機械の導入による作業の効率化が図られるほか、用・排水管理の省力化や合理化、水稻栽培に小麦や大豆などを組み合わせた輪作の実施による生産性の向上が

期待されている。水稻直播栽培においても、地下水位制御システムが整備されたことにより、乾田直播に取り組み始めた農家もあり、直播栽培の普及にもつながっている。

スマート農業の取組み

妹背牛町は泥炭土が多く、ほ場表面に凹凸が生じやすい。加えて、ほ場の大区画化や水稻直播栽培の普及に伴い、ほ場を効率的に均平にする作業が大きな課題となる。このため、レーザーレベラーを使って均平作業を行っていたが、レーザーレベラーの普及が進むにつれて、隣で作業している発光機のレーザーと干渉して誤作動を起こすことが心配された。また、経営規模が大きくなるにつれて、農家のG

PSガイドシステムに対する関心も高まってきていた。こうしたことを背景に妹背牛町では、平成二五年に役場屋上にRTK-GPSの基地局を設置した。GPSレバーを採用することで、干渉作用を気にすることなく、レーザーレバーと同等以上の精度を確保することができた。妹背牛町は面積が小さいうえに平坦であるので、役場屋上の基地局一つで町内全域



均平作業



役場屋上アンテナ



ハーブ植栽風景



役場前のハーブ

の利用が可能である。

今後は自動操舵装置の導入によって、作業分野の拡大やさらなる作業の精度向上、効率化を図ろうとしている。既に水稲移植作業の効果実証試験も実施しており、今後は普及に向けた取組みが進んでいく。当面の課題はGPSガイドシステムのや自動操舵装置の導入経費である。

ハーブの植栽による クリーンな米づくりの推進

妹背牛町では付加価値の高い米づくりを進めようと、平成一〇年から化学農薬の使用回数を北海道の一般的な栽培の五割に減らすなど、環境に与える負荷を減らしたクリーン農業の取組みを進めている。その象徴となっているのが水田の畦道に植えられたハーブ

(アップルミント)である。

平成一二年にカメムシの発生により米の品質が大きく低下する被害が発生したことを受けて、可能な限り農薬に頼らないでカメムシの侵入を防いでいくため、水田の畦道にハーブを植え始めた。カメムシが集まる水田周辺のイネ科雑草を減らすとともに、農村の田園景観の改善にもつながる取組みだ。各地区の農家組織が主体となってハーブを植えており、毎年面積は広がっている。さらに、役場前の通りの中央分離帯には地域住民の協力により様々なハーブを植えて町民に紹介している。

ハーブを使って農薬の使用を抑えている米については、コープさっぽろで「妹背牛産ななつぼし」として販売されているほか、町では、ふるさ

と納税の返礼品として扱っている。彩りも鮮やかにハーブが香る水田から収穫しているクリーンな米をイメージする「北彩香（きたさいか）」という名称で、品種は「ななつぼし」と「ゆめぴりか」の二品種だ。5kgの袋入りのほか、三〇〇グラムに小分けして真空パック包装したものを各品種三袋ずつ六袋のギフト用詰め合わせを返礼品としている。妹背牛産米のPRのほか、近年の消費者の嗜好も探る考えのようだ。



北彩香プレミアム



北彩香ギフトセット

基幹産業である農業の振興などで安定した雇用を創出することとしており、「農業従事者数」を数値目標とし、「安心・安全な農作物作付面

その一方で、刈り取ったハーブの活用も検討している。試行錯誤を繰り返して、ハーブを原料とした焼酎が誕生し、町内の商店で販売している。「ハーブの香るまちづくり」に向けてハーブを活かした取り組みを進めているところである。

地方創生における

農業振興

妹背牛町の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、

「積」と「新規就農者数（後継者を含む）」を重要業績評価指標（KPI）としている。具体的には、安心・安全な農産物の作付け拡大やハーブ植栽を中心とした美しい田園景観づくりの推進、GPS等高性能機械の導入や大区画圃場の整備による農作業の効率化、農業研修生の受入や新規就農者支援の充実などの施策を進めることとしている。

一番の課題は担い手の確保だ。町では、あと一〇年すれば平均的耕作面積が三〇ha近くになると予想している。直播栽培の拡大、ほ場の大区画化やスマート農業の推進などで効率化を進め、当面の規模拡大に対応しながら、ハーブを活かしたクリーン農業を推進して米のブランド化を進めるなど、産地としての魅力を

高めて後継者の確保に努める一方で、何とか新規参入者を迎えることができる環境を整えたいとしている。稲作では新規参入希望者が少なく、町では対応に苦慮している。まずは、農家や関係機関と連携体制をつくり、農業体験研修生の受入を増やすため、研修希望者にアピールできるような条件整備を進めることが必要ではないだろうか。

郷土館で

妹背牛町郷土館に立ち寄った。現在開館しているのはお盆期間だけで、普段は開館していない。たまたま係の方がいらっしゃって見学することができた。町のホームページには、「妹背牛郷土館は、昭和六年に村役場として建築さ

れたものです。事務室と議事堂を左右対称にしたつくりは明治期のフランス風のデザインの流れをくんだ建築物として高い評価を受けており、昭和六〇年新庁舎落成を機に建築当時の姿に復元したものです。」とある。内部はとても

きれいに管理されており、床材の一部は当時のままだという。開拓当のさまざまな農具が展示されている中にタコ足型の播種器があった。また、稲の古い品種も展示されており、「坊主」を見つけた。「北海道の稲作」(星野達三編著・一九九四年)によると、明治中後期に稲作が石狩から空知・上川へと急激に北進していくが、これには、大規模な灌漑溝の造成などとともに、直播器の考案と「坊主」の出現による直播栽培の導入が大

きく寄与しているという。そんな歴史を垣間見ることができた。

直播栽培は、育苗技術や機械化の発展などにより一旦は姿を消した。今、農家戸数の減少や少子高齢化の進展により一戸当たりの栽培面積が増え、移植栽培だけでは春先の労働力が不足する農家が増えていること、今後ますますこうしたことが顕在化することを考えれば、直播栽培は北海道の稲作の維持・発展に欠くことのできない技術となっており、一層の技術進歩や新たな品種の登場が期待される。米政策の見直しに備えてあなたの町では何をしていますかとあらためて問われても、明確に回答できる市町村は多くはないのではないかと。しかしながら、妹背牛町の例のよ

うに、実は地域の中で、農業者の中で、将来に備えた取組みが着実に進んでいるのではないだろうか。そうでなければ米産地としての北海道の地位や評価がこんなにも上がってきていないはずである。

〈取材後記〉

農業ばかりの話題になってしまったので、最後に他の話題も少し。妹背牛町といえば、筆者の世代が真っ先に思い浮かぶのはバレーボールであったが、今はカーリング。屋内カーリング専用施設があり、全国的な大会も開催されている。町ではこのカーリングホールを練習拠点とする選手の中から将来オリンピック選手を出すことをめざしている。すでに妹背牛町出身の大学生や高校生が全国大会などで活

躍しているという。これからが楽しみだ。

夏場家族連れに隠れた人気があるのが、ウオータースライダーのある遊水公園うらら。バスやパトカーなどのバッテリーカーや木製の遊具なども揃っており小さな子供たちが楽しめる。雨が降ったら、隣接するカーリングホールはエアポリンなどの遊具がある「みんなの遊び場」になっている。また、パークゴルフ場や温泉ペペルもあり、家族みんなで楽しめる。

◆ ◆ ◆
妹背牛町役場、JA北いぶき妹背牛支所には、取材や資料・写真の提供等多くの協力をいただきました。お礼申し上げます。